

Q：受験の準備として学習すべき教材は？

A：この試験のための教材は、すべて本紙に収録されています。英文は、2010 *Introductory Exam Study Guide* を会館ブックストアでお求めください（\$2.00）。また、ウェブサイト [sgi-usa.org](http://sgi-usa.org) にも掲載されています。

Q：試験問題の様式は？

A：全部で20問、すべて正誤選択式です。

Q：試験は他の言語でも受験可能ですか？

A：はい、受験できます。詳しくは各言語グループの担当者にお問い合わせください。

## 【第1部 基礎仏法用語】

### 1. 信行学

#### 諸法実相抄 信心を根本に行学の実践を

行学の二道をはげみ候べし、行学たへなば仏法はあるべからず、我もいたし人をも教化候へ、行学は信心よりをこるべく候、力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし（御書 1361 鈔）

本抄は、文永10年（1273年）5月17日、日蓮大聖人が52歳の時に佐渡の一谷で著され、最蓮房日浄に送られた御抄です。

この御文は、「信行学」という仏法実践の根本について述べられている本抄の結論部分にあたる箇所です。

まず、御本尊への強盛な信心を根幹として、「行学の二道」に励んでいくことが肝要であると仰せです。「行」とは自行・化他にわたって南無妙法蓮華経の題目を唱えていくことであり、「学」とは、大聖人の御書を根本に仏法の法理を学んでいくことです。

「行学たへなば仏法はあるべからず」と仰せのように、いかに外形が立派な寺院などの建物があつたとしても、行学の実践がないところには、もはや仏法は存在していないのです。

また「我もいたし人をも教化候へ」と仰せの通り、行の実践は自行だけでは

なく、化他にわたるものでなければなりません。化他を行わないのは、一切衆生を救おうとする仏の心に背くからです。

そして、「行学は信心よりをこるべく候」と仰せです。真の信心は行学の実践に表れるのであり、心で信じていれば行学を行わなくてもよいというのは、間違いです。さらに「力あらば一文一句なりとも語らせ給うべし」と仰せのように、自分の力の及ぶ限り、少しでも仏法を語っていこうと努力していくことが大切であり、大聖人のお心にかなった実践なのです。

池田SGI会長は、このように指導しています。

「ただ、お経を読んでいれば信仰なのではない。口がうまいとか、指導ができるとか、それが信仰なのでもない。本当の信仰者とは、どんなことがあっても、大聖人の仰せの通りの『信行学』の実践を最後の最後まで貫いていく人である。広宣流布へ戦い抜く人である。これが、大聖人の仏法の真髓の行動である」(2001年1月 本部幹部会)

「信行学」の実践の道を踏みはずすのは易しいことで、はじめのうちは自由な雰囲気を楽しんでいるように見えますが、結局、自己中心、自己満足に陥り、妙法のリズムから離れていってしまいます。各自が間違いなく自己の成長と幸せ、そして広宣流布の前進へ向かっていくために、SGIという組織があるのです。法華経に説かれた通り、大聖人が仰せの通りに実践している団体が私たちのSGIです。SGIの同志と共に日蓮仏法の弘通に励んでいくなかに、自己の成長があり、一生成仏が叶うのです。

(*World Tribune* 12/19/08 日本語版 09年1月1日付)

## 2. 十界 (じっかい) 境涯を変革する指針

「十界」とは、生命の境涯を十種に分類したもので、仏法の生命観の基本となるものです。十界の法理を学ぶことによって、生命の境涯を的確にとらえ、各人がそれぞれの境涯を変革していく指針を得ることができます。

「十界」それぞれの名を挙げれば、**地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人界・天界・声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界**です。

このうち地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天をまとめて「六道」、声聞・縁覚・菩薩・仏をまとめて「四聖(ししょう)」といいます。「六道」は、インド古来の世界観を仏教が用いたもので、もともとは生命が流転する世界を六つに大別したものです。また「四聖」は仏道修行によって得られる境涯です。

法華経以外の経典では、地の下に地獄があると説いたり、遠く離れた所に浄

土（清らかな国土）を求めるなど、十界は全く別々に存在する世界としてとらえられていました。

しかし法華経では、その考え方を根本的に破り、十界は固定的な別々の世界としてあるのではなく、一個の生命に具わる十種の境涯であることを示したのです。したがって、十界のいずれか一界の姿を現している生命にも十界がすべて具わっており、他の界の境涯をも現しうることが明らかになります。これを十界互具といいます。

日蓮大聖人は、「浄土と云うも地獄と云うも外には候はず・ただ我等がむねの間にあり、これをさとるを仏といふ・これにまよふを凡夫と云う」（御書 1504 鈔、通解——仏の清らかな国土といっても地獄といっても外の所にあるのではありません。ただ我々の胸の間にあるのです。このことを悟るのを仏といい、このことに迷うのを凡夫というのです）と述べられています。

生命に十界がすべて具わっているということは、たとえ今の自分が地獄の苦しみの生命であっても、仏界の大歓喜の生命へと変革していくことができるということです。このように法華経に基づく十界論は、自身の生命を変革できることを示す原理となります。



### ① 地獄界（じごくかい）

地獄は、もともとは「地下の牢獄」という意味で、経典には八熱地獄、八寒地獄など数多くの地獄が説かれています。

地獄界は、苦しみに縛られた最低の境涯です。「地」は最底を意味し、「獄」は拘束され、縛られた不自由さを表します。

「地獄おそるべし炎を以て家とす」（同 1439 鈔）といわれるように、地獄界とは、自身を取り巻く世界全体を、炎のように自身に苦しみを与える世界と感じる境涯といえます。

また、大聖人は、観心本尊抄で「瞋（いか）るは地獄」と仰せです。「瞋り」とは、思い通りにいかない自分自身や、苦しみを感ぜさせる周りの世界に対して抱く、やり場のない恨みの心です。苦の世界に囚われ、どうすることもできない生命のうめき声が瞋りです。いわば「生きていること自体が苦しい」、「何を見ても不幸に感じる」境涯が地獄界です。

また破壊衝動に駆られて、自分と他者を壊していくことも地獄界の生命といえるでしょう。人間の苦しみの極限である戦争は、まさに地獄界の生命の表れにほかなりません。

### ② 餓鬼界（がきかい）

餓鬼界とは、欲望が満たされずに苦しむ境涯です。

餓鬼のもともとの意味は「死者」のことです。死者が常に飢えて食物を欲しているとされていたことから、とどまるところを知らぬ激しい欲望の火に身も心も焼かれていく生命状態を餓鬼界と表現します。

大聖人は「餓鬼悲むべし飢渴にうへて子を食ふ」(同 1439 ㊦)、「**貧るは餓鬼**」と仰せです。飢えて子まで食べるというような貪り、すなわち際限のない欲望にふりまわされ、そのために心が自由にならず、苦しみを生じる境涯のことです。

もちろん、欲望そのものには善悪の両面があります。人間は、食欲などの欲望がないと生きていられないことも事実です。また、欲望が人間を進歩、向上させるエネルギーとなる場合もあります。しかし、欲望を創造の方向に使えず、欲望の奴隷となって苦しむのが餓鬼界です。

### ③ 畜生界 (ちくしょうかい)

畜生という言葉は、もともとは獣や鳥などの動物を指します。畜生界の特徴は、目先の利害にとらわれ、理性が働かない「愚かさ」です。大聖人は「癡(おろか)は畜生」と説かれています。正邪・善悪の判断がつかず、本能のままに行動してしまう境涯です。

また「**畜生の心は弱きをおどし強きをおそる**」(同 957 ㊦)「畜生は残害とて互に殺しあふ」(同 1439 ㊦)といわれるように、畜生界の生命は、理性や良心を忘れ、自分が生きるためには他者をも害していく弱肉強食の生存競争に終始していく境涯です。目先のことしか見えず、未来を思考できない愚かさの故に、結局は、自己を破滅させ、苦しむのです。

(畜生との表現は古代インドの表現を踏襲したものです。動物であっても例えば盲導犬のように人を助けることを使命として生きる例もあります。また逆に人間であっても、戦争のように他の動物よりも残酷な行為をする場合もあります)

地獄界・餓鬼界・畜生界の三つは、いずれも苦悩の境涯なので「三悪道」といいます。

### ④ 修羅界 (しゅらかい)

修羅とは、もともとは阿修羅といい、争いを好むインドの神の名です。

自分と他者を比較し、常に他者に勝ろうとする「勝他の念」を強くもっているのが修羅界の特徴です。

他人と自分を比べて、自分が優れて他人が劣っていると思う場合は、慢心を起こして他を軽んじます。そして、他者の方が優れていると思う場合でも、他者を尊敬する心を起こすことができません。また、本当に自分よりも強い

ものと出会ったときには、卑屈になってへつらうものです。

自分をいかにも優れたものに見せようと虚像をつくるために、表面上は人格者や善人をよそおい、謙虚なそぶりすら見せることもありますが、内面では自分より優れたものに対する妬みと悔しさに満ちています。このように内面と外面が異なり、心に裏表があるのも修羅界の特徴です。

故に、大聖人は「**諂曲（てんごく）なるは修羅**」と説かれています。「諂曲」とは「諂（へつら）い」「曲がった」心のことで、「諂」も「曲」も「心が曲がっている」ことです。「諂い」とは、具体的には「自分の本心を見せないで従順をよそおう」ことです。

この修羅界は、貪瞋癡（とんじんち）の三毒（貪り、瞋り、癡という三つの根本的な煩惱）にふりまわされる地獄・餓鬼・畜生の三悪道と異なり、自我意識が強い分だけ三悪道を超えているといえます。しかし、根本は苦しみを伴う不幸な境涯なので、三悪道に修羅界を加えて「**四悪趣**」ともいいます。

#### ⑤ 人界 （にんかい）

人界は、穏やかで平静な生命状態にあり、人間らしさを保っている境涯をいいます。大聖人は「**平らかなるは人**」と仰せです。

この人界の特質は、物事の善悪を判断する理性の力が明確に働いていることです。大聖人は「賢きを人と云いはかなきを畜といふ」（同 1174 ㊦）とされています。善悪を判別する力を持ち、自己をコントロールできる境涯です。

この人間らしい境涯も、決して努力なしに持続できるものではありません。

実際に、悪縁が多い世間にあつて、人間が「人間らしく生きる」ことは難しいものです。それは、絶え間なく向上しようとする自分の努力がなければ不可能です。いわば人界は「自分に勝つ」境涯の第一歩といえます。

また人界の生命は「**聖道正器（しょうどうしょうき）**」といわれ、仏道（聖道）を成ずることができる器であるとされています。

人界は悪縁にふれて悪道に堕ちる危険性もある半面、修行に励むことによって四聖への道を進むことができる可能性をもっているのです。

#### ⑥ 天界 （てんかい）

天界の天とは、インドにおけるもともとの意味は、地上の人間を超えた力を持つ神々のこと、また、それらが住む世界という意味です。インドでは、今世で善い行いをした者は来世に天に生まれると考えられていました。

仏法では、天界を生命の境涯の一つとして、欲望を満たした時に感じる喜びの境涯として位置づけています。大聖人は「**喜ぶは天**」と仰せです。

欲望といってもさまざまです。睡眠欲や食欲などの本能的欲望、新しい車や家が欲しいというような物質的欲望、社会で地位や名誉を得たいという社会的欲望、未知の世界を知ったり、新たな芸術を創造したいというような精神的欲望などがあります。それらさまざまな欲望が満たされ、喜びに浸っている境地が天界です。

しかし、天界の喜びは永続的なものではありません。時の経過とともに薄らぎ、消えてしまいます。ですから天界は目指すべき真実の幸福境涯とはいえないのです。

## 六道から四聖へ

以上の地獄界から天界までの六道は、結局、自身の外の条件に左右されています。環境に左右されているという意味で、六道の境涯は本当に自由で主体的な境涯とはいえないのです。

これに対して、その六道の境涯を超え、環境に支配されない主体的な幸福境涯を築いていこうとするのが仏道修行です。そして仏道修行によって得られる境涯が声聞、縁覚、菩薩、仏の四聖の境涯です。

⑦ 声聞界 (しょうもんかい)

⑧ 縁覚界 (えんかくかい)

声聞界と縁覚界の二つは、仏教のなかでも小乗教の修行で得られる境涯で、この声聞界と縁覚界とをまとめて「二乗」と呼びます。

声聞界とは、仏の教えを聞いて部分的な悟りを獲得した境涯をいいます。これに対して、縁覚界は、さまざまな事象を縁として、自らの力で仏法の部分的な悟りを得た境涯です。

二乗の部分的な悟りとは「無常」を悟ることです。無常とは万物が時間の推移とともに変化・生滅することをいいます。自分と世界を客観視し、世間すなわち現実世界にあるものがすべて時とともに変化・生滅するという真理を自覚し、無常のものに執着する心乗り越えていくのが二乗の境涯です。

私たちも、日々の生活の中で、自分自身を含めて万物が無常の存在であることを強く感ずることがあります。ゆえに大聖人は「世間の無常は眼前に有り豈人界に二乗界無からんや」(同 241 頁)と言われ、人界に二乗界が具わっているとされたのです。

この二乗の境涯は、仏教のなかでも小乗教が理想としたもので、二乗の境涯を得た小乗教の聖者は、無常のものに執着する煩惱こそ苦しみの原因であるとして、煩惱を滅しようとしてきました。しかし、そのために自分自身の心身のすべてを生滅させるという誤った道(灰身滅智=けしんめっち)に入って

しまいます。

二乗が得た悟りは、仏の悟りから見れば、あくまでも部分的なものであり、完全なものではありません。しかし、二乗はその低い悟りに安住し、仏の眞実の悟りを求めようとしません。師匠である仏の境涯の偉大さは認めていても、自分たちはそこまで到達できると考えず、自らの低い悟りにとどまってしまうのです。

また、二乗は自らの悟りのみにとらわれ、他人を救おうとしないエゴイズムに陥っています。

このように、「自分中心」の心があるところに二乗の限界があります。

### ⑨ 菩薩界 (ぼさつかい)

菩薩とは、仏の悟りを得ようとして不断の努力をする衆生という意味です。二乗が仏を師匠としていても、自分たちは仏の境涯には至れないとしていたのに対し、菩薩は、師匠である仏の境涯に到達しようと目指していきます。

また、仏の教えを人々に伝え弘めて人々を救済しようとしています。

すなわち、菩薩の境涯の特徴は、仏界という最高の境涯を求めていく「求道」とともに、自らが仏道修行の途上で得た利益を、他者に対しても分かち与えていく「利他」の実践があることです。

現実の世間のなかで、人々の苦しみと悲しみに同苦し、抜苦与樂の実践をして、自他ともの幸福を願うのが菩薩の心です。

二乗が「自己中心」の心にとらわれて低い悟りに安住していたのに対して、菩薩界は「人のため」「法のため」という使命感をもち、行動していく境涯です。

この菩薩界の境涯の根本は「慈悲」です。大聖人は、観心本尊抄で「**無顧の悪人も猶妻子を慈愛す菩薩界の一分なり**」(同 241 頁)と仰せです。他人を顧みることのない悪人ですら自分の妻子を慈愛するように、生命には本来、慈悲が具わっています。この慈悲の念を万人に向け、生き方の根本にすえるのが菩薩界です。

### ⑩ 仏界 (ぶつかい)

仏界は、仏が体現した尊極の境涯です。

仏(仏陀)とは覚者の意で、宇宙と生命を貫く根源の法である妙法を覚った人のことです。具体的にはインドで生まれた釈尊などです。また、さまざまな経典に阿弥陀如来などの種々の仏が説かれています。これは仏の境涯の素晴らしさを一面から譬喩的に示した架空の仏です。

日蓮大聖人は、末法の一切衆生を救うために、一個の人間として御自身の

生命に仏界の境涯を顕し、一切衆生の成仏の道を確立された末法の御本仏です。

仏界とは、自身の生命の根源が妙法であると悟ることによって開かれる、広大で福德豊かな境涯です。この境涯を開いた仏は、無上の慈悲と智慧を体現し、その力で一切衆生に自分と等しい仏界の境涯を得させるために戦い続けます。

仏界は、私たちの生命の中にも本来、具わっています。ただ、それを現実の生命に現すことが難しいので、大聖人は人々が仏界の生命を現していくための方途として御本尊を御図顕されました。

「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、……日蓮が・たましひは南無妙法蓮華經に・すぎたるはなし」(同 1124 頁) と仰せのように、御本尊に末法の御本仏・日蓮大聖人の仏界の御生命が顕されているのです。そして、その真髓が南無妙法蓮華經です。私たちは御本尊を信じて自行化他にわたる唱題に励むときに、胸中の仏界を現すことができるのです。

仏界の生命と信心との深い関係について大聖人は、観心本尊抄で「末代の凡夫出生して法華經を信ずるは人界に仏界を具足する故なり」(同 241 頁) と言われています。法華經は万人が成仏できることを説く教えですが、その法華經を信ずることができるのは、人間としての自分の生命の中に本来、仏界が具わっているからです。

また、この大聖人の仰せを受けて日寛上人は「法華經を信ずる心強きを名づけて仏界と為す」と述べています。

この法華經とは末法の法華經である御本尊のことで、御本尊を信じて生き抜く「強い信心」そのものが仏界にほかならないということです。

この仏界の境涯を現代的に言うならば、何ものにも侵されることのない「絶対的な幸福境涯」といえましょう。戸田第2代会長は、仏界の境涯について「生きていること自体が幸福であるという境涯」と述べています。

また仏界の境涯は、しばしば師子王に譬えられます。どのような状況下でも師子王のように恐れることのない、真の安心立命の境涯であるといえます。

(*Living Buddhism*, May-June 2009, pp. 87-94, 大白蓮華 07 年 10 月号 81-87 頁)

### 3. 宿命転換 幸福への希望の法理

人類を宿命の苦悩から救ったのが日蓮大聖人の仏法です。まず仏教一般の立場を説明しましょう。

仏教では、自分自身の善悪の行為が自身の命に刻まれて因（原因）となり、未来の果（結果）が定まるという、因果による業思想を説きます。

本来、この「業（カルマ）」には、善と悪の両方があるのですが、仏教で問題となるのは、主として悪業の方です。

過去世から現在に至るまで、自身が悪業を積み重ねてきた結果として、現在受けている悪の報い——それが仏法で説く「宿業」「宿命」です。

一般に仏教で説く宿業論は、因果応報——すなわち、悪因があれば悪果があり、善因があれば善果があるとする考え方です。したがって、幸福になるためには、自分がこれまでに犯した一つ一つの悪業の報いを受け、それらをすべて消し去らなければなりません。

日蓮大聖人は、「過去に法華経の実践者を軽んじ、尊くすぐれた経典である法華経をあざけり、あなどった」（御書 960 ㊦、趣意）ことが一切の悪業の根源であると述べます。

すなわち、妙法という「生命の根源の法」を信じられない不信や迷い（無明）こそが、宿業の根源であると説きます。したがって、「生命の根源の法」に則って仏界を涌现し、不信や迷いを克服することで、一切の宿業を転換できるのです。

大聖人は「地獄の苦みばつときへて」（同 1000 ㊦）とも仰せです。永遠に続くであろう地獄の苦しみを、直ちに消していけるのです。

例えば、夜中にきらめく星々も、太陽が昇れば、私たちの目には見えなくなります。

それと同様に、深い信によって妙法の太陽が胸中に昇れば、その陽光の前に、それまでの一切の宿業は“問題にならないくらいちっぽけなもの”としてかすんでしまうのです。

宿業のない人などいません。大切なのは、目の前に宿業が立ちはだかったときに、そこから逃げるのではなく、真正面から捉えて、どこまでも信心を根本にさらなる前進を開始することです。

大聖人は、「鉄は炎打てば剣となる」（同 958 ㊦）、「くろがねをよくよくきたへばきずのあらわるるがごとし」（同 1083 ㊦）と仰せです。

熱い鉄を何度も鍛え打ち、不純物を出すことで強靱な剣ができあがる。

同様に、私たちも苦難を避けることなく立ち向かい、乗り越えることで“何ものにも負けない確固たる自己”を築くことができるのです。

草創以来、多くの学会員が、広布の活動に励むなかで、自らの宿業を転換し、何にも揺るがぬ幸福境涯を築きました。まさに学会活動こそ、あらゆる宿命を転換し、生命を鍛錬する最高の舞台です。

“目の前の苦悩や課題が大きければ大きいほど、自身の人生を大きく変えて

いける” との大確信で、学会とともに宿命転換の大道を堂々と歩もうではありませんか。

(*Living Buddhism*, January-February 2010, pp. 97-99, 聖教新聞 07 年 5 月 18 日付)

#### 4. 三障四魔 仏道修行を妨げる働き

日蓮大聖人は、「四季の変わり目には変化があるように、凡夫が成仏するとき、必ず三障四魔が競う」（御書 1091 鈔、趣意）と仰せです。その三障四魔とは、三つの「障り」と四つの「魔」です。大聖人は「摩訶止観」（第 5 卷）を引いてこう記されています。

「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず」（同 1087 鈔、通解＝仏法の実践と理解に励んでいくなら、必ず三障四魔がさまざまな姿で紛らわしく競い起こる。しかし、それらに決して随ってはならない。また、恐れてはならない）

船も止まっていると静かですが、航海に出ると波浪に遭います。飛行機も進むと空気抵抗を受けます。

同様に、仏道修行が進んでいくと、それを止めようとする働きがあります。つまり、障魔は人間革命が進み、宿命転換がなされている証拠なのです。そして、「紛らわしく」——魔と分かりにくいのが特徴です。

「三障」の「障」とは、「さわり」という意味です。まず「煩惱障」とは、貪（むさぼ）り・瞋（いか）り・癡（おろか）などの煩惱によって起こる障りです。自身の欲望や感情に突き動かされて、仏道修行を怠ってしまうことです。

二つ目の「業障」の「業」とは「行為」のことで、自身の悪い行い（五逆罪、十悪業など）によって起こる障りです。

最後の「報障」の「報」とは「報い」のことです。正法を非難するなどの、過去世の悪い行為の「報い」として、三悪道に墮ちることなどからくる障りです。

「四魔」の「魔」は、「智慧の命を奪う者」「功德を奪う者」などの意味で、仏法を実践する人の内面から、生命の輝きを奪おうとする働きのこと。「陰魔」「煩惱魔」「死魔」「天子魔」の四つです。

最初の「陰魔」とは、心身の働き（＝五陰）が不調になり、仏道修行が妨げられること。「煩惱魔」とは、貪瞋癡などの煩惱によって信心が破壊されること。平たく言うと、体調を崩して（陰魔）、あるいは欲望に負けて（煩惱魔）勤行・唱題を忘れたり、活動

から離れたりすることなどです。

次に、「死魔」は、生命そのものを奪い、仏道を妨げる働きです。また、他の修行者の死を見て、動揺することも「死魔」です。

「天子魔」は、「他化自在天子魔」の略で、人を思いのままに操ることを喜びとする「第六天の魔王」の働きです。最も本源的な魔であり、その本体は、「元品の無明（根本の暗さ、迷い）」で、あらゆる力を使って信心修行に圧迫を加えてきます。

実は、「三障四魔」といっても、第六天の魔王がさまざまに働かせていたのです（同 1081 頁）。私たちはこれらの障魔に屈することなく、乗り越え、進み続ける「信心」が大切になるのです。

仏法は仏と魔の絶え間ない闘争です。

釈尊も成道するとき、魔が競いました。後、教団が大きくなると、バラモン等の勢力から、さまざまな弾圧があったのです。

一人、仏道修行に挑んだ天台の観念観法とは異なり、社会のまっただ中で仏道修行に励む門下に競う「三障」について、日蓮大聖人は具体的、実践的に記されています。すなわち、「業障」を、夫あるいは妻、また子からの妨げ、と（同 1088 頁）。

「報障」を自分で選択できない「父母」と並べて「主君」からの迫害（同 頁）に。現在でいえば、政治権力をもつ人からの迫害もこれにあたりましょう。

「第六天の魔王……或は国王の身に入って法華經の行者ををどし」（同 1082 頁）と、第六天の魔王が国家権力を使って弾圧する、と記されています。

私たちは権力の魔性を鋭く見破り、信仰を妨げようとする蠢動を打破していかなくてはなりません。

宿命転換、人間革命の勝負時は、三障四魔が競い起こったときです！

「必ず三障四魔と申す障いできたれば賢者はよろこび愚者は退く」（同 1091 頁）とあるように、決して引くのではなく、喜んでこれに立ち向かい、魔を乗り越えていくとき、大きく境涯を開くことができるのです。

（*Living Buddhism*, March-April 2010, pp. 88-90, 聖教新聞 08 年 11 月 20 日付）

## 5. 南無妙法蓮華經 崩れぬ幸福境涯を開く根本の法

### 南無妙法蓮華經とは

釈尊が説いた最高の経典である「法華經」の題目は「妙法蓮華經」と呼ばれ

ます。古代インドの言葉（梵語＝サンスクリット語）では「妙法蓮華經」は「サ・ダルマ・フンダリキヤ・ソタラン」と発音していました。4世紀中国の著名な学僧で翻訳家である鳩摩羅什（くまらじゅう）が法華經の題目の意味をもれなく汲み取って「妙法蓮華經」と訳したのです。

日蓮大聖人は、妙法蓮華經を単なる經典の題目としてでなく、極めて重要な意義を覚知されていたのです。妙法蓮華經の上に「南無」を加えられたことに重要な意味があります。「南無」とは、サンスクリット語の「ナマス」という音を漢字で表したもので、漢字に意味はありません。「ナマス」とは「帰依する、帰命する」、つまり命を捧げる、それほど大事に敬うということです。

大聖人は「帰命」について「帰と云うは迹門不変真如の理に帰するなり命とは本門随縁真如の智に命くなり」（御書 708 ㊦）と仰せられています。妙法を根本にしたとき、いかなる変化にも対応できる真実の智慧に基づいた人生を確立できるということです。

また大聖人は「南無とは梵語・妙法蓮華經は漢語なり梵漢共時に南無妙法蓮華經と云うなり」（同 708 ㊦）と仰せです。つまり、南無妙法蓮華經の教えは、特定の言語や文化に限られたものではないとの仰せであると拝せます。大聖人御在世当時の13世紀日本では、梵語（サンスクリット語）は西欧文明の言語・文化を代表するもので、漢語は東洋文明の言語・文化を代表すると言えます。東西の言語が合体することによって、南無妙法蓮華經は全人類にとって普遍的な音声を表す言葉になったのです。

大聖人は法華經に説かれた通りに実践され、民衆の幸せのために妙法の弘通に全生涯をかけられました。その結果、法華經に予言された通り、生命にも及ぶ厳しい迫害に遭われたのです。この意味で、大聖人は法華經を“身読”され、御自身が生命の真理であり宇宙の根本法である妙法蓮華經と一体不二であることを悟られたのです。そのことを「経王殿御返事」に「仏の御意は法華經なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華經に・すぎたるはなし」（同 1124 ㊦）と仰せになっています。

大聖人は全人類のために御自身の生命に妙法を具現されたが故に、「末法の御本仏」と呼ばれるのです。

### 南無妙法蓮華經の意味

大聖人が「御義口伝」に「妙とは法性なり法とは無明なり無明法性一体なるを妙法と云うなり」（同 708 ㊦）と仰せのように、「妙法」の2文字は、「仏の悟りの生命」と「凡夫の迷いの生命」を表していて、同時に、この2つが一体であることを示しています。

ほとんどの仏教宗派は、仏と凡夫には大きな隔たりがあると説きますが、日蓮仏法では両者の間の差異を否定します。例えば、「生死一大事血脈抄」で次のように明言されています。「然れば久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華経と我等衆生との三つ全く差別無しと解りて妙法蓮華経と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり」（同 1337 鈔）

また「妙は死法は生なり」（同 1336 鈔）、更に「一生成仏抄」には「有無に偏（へん）して中道一実の妙体にして不思議なるを妙とは名くるなり、此の妙なる心を名けて法とも云うなり」（同 384 鈔）と仰せです。つまり「妙法」とは、生の生命、死の生命ともに一貫して具わる生命の本質を表しているのです。

「蓮華」とは、原因と結果がつねに一体であること、つまり「因果具時」の原理を表しています。「御義口伝」には「因果一体なり」（同 708 鈔）と仰せです。「因」とは成仏を目指す修行、「果」とは成仏の果ということです。「因果具時」とは、私たちが南無妙法蓮華経と唱えた瞬間に、勇気、慈愛、智慧に満ちた仏界の生命が涌現するという意味です。

最後に「経」とは文字通り、仏が説いた教えということです。大聖人は「御義口伝」に「経とは一切衆生の言語音声を経と云うなり、釈に云く声仏事を為す之を名けて経と為すと」（同 708 鈔）と仰せです。私たちが唱題し、また他の人に南無妙法蓮華経について語っていくとき、その音声が自己のまた他の人の仏性に共鳴し、仏界の生命を呼び覚ましていくのです。

このほか南無妙法蓮華経とは、いろいろ説明の仕方がありますが、私たちににとっては、この妙法に帰命する、つまり妙法を根本に、自他ともの幸せと成長を願って実践するという意味が重要になってきます。

南無妙法蓮華経は、正法・像法時代の論師、人師によって知られてはいましたが、それは自行のためだけであったのに対し、大聖人は「末法に入て今日蓮が唱る所の題目は前代に異り自行化他に亘りて南無妙法蓮華経なり」（同 1022 鈔）と仰せになっています。

## 唱題の心構え

大聖人の仏法においては、“実践”がもっとも大切です。日々の真剣な行動のなかにこそ、南無妙法蓮華経の真価が現されることを銘記しましょう。それは、私たち自身の人間性、功德、人生勝利の実証として輝いてくるのです。

大聖人は、「ただ心こそ大切なれ」（同 1192 鈔）と「心」つまり「信心」がもっとも大切であると強調されています。私たちが自他ともの幸福を願いつつ、各自がもつ無限の可能性を信じて唱題していくとき、必ずや妙法の偉大な力用を確信するに違いありません。

池田 SGI 会長は、次のように語っています。

「人生の成功と失敗、楽しみと苦しみの境は、いったい、何によるのか？それは複雑であり、微妙である。しかし、南無妙法蓮華経は、『絶対勝利』の法である。『常楽我浄』の悠然たる長者の生命となりゆく仏法なのである。南無妙法蓮華経を持つことは、いかなる財宝を持ち、大邸宅を持つよりも、ずっとずっと裕福なのである。南無妙法蓮華経は、大宇宙の生命であり、根源の法である。それを唱えているのだから、何の心配もない。日蓮大聖人の仰せには、絶対に嘘はないのである。幸福と勝利のための我らの信仰であり、信心である。永遠唯一の御本仏あられる大聖人の仏法の実体である」(2010年2月6日 本部幹部会)

池田 SGI 会長の指揮のもと、大聖人の仰せの通り、広宣流布（南無妙法蓮華経を世界に弘通すること）に献身しているのは私たち SGI メンバーだけであり、全人類のため、その功德力の見事な実証を示しているのです。

(*Living Buddhism*, May-June 2010, pp.80-85)

## 6. 御本尊

### 仏界の境涯を涌現

多くの同志が心に刻んできた有名な御文に「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ」(御書 1124 鈔) とあります。

「本尊」という言葉は、「根本尊敬」を略したものとされています。宇宙の根本法である南無妙法蓮華経を、曼荼羅として顕されたものが御本尊です。私たちが御本尊に向かい、南無妙法蓮華経と唱えるとき、自身の生命に妙法の力用である仏界の境涯を涌現することができるのです。

全ての宗教はそれぞれの本尊を立てています。多くの場合、神や超自然的な対象物です。仏教の各宗派は、伝統的に仏と仏の教えを崇拜します。しかし、仏の概念と教えの内容は、宗派によって大きく異なります。例えば、釈尊はもともと民衆の苦を救い、成仏に導くために献身した、いわば普通の人間だったのです。ところが釈尊の滅後、人々は釈尊を神格化し、拝む対象としたのです。多くの宗派は釈尊の仏像や画像をつくり、民衆が仏の救いを求めて礼拝するように仕向けていきました。

これに対し、日蓮大聖人は、「若し己心の外に法ありと思はば全く妙法にあらず麤法（そほう）なり」(同 383 鈔) と仰せになり、仏や法が自分の生命の外に存在すると思えば、それは妙法でなく劣った教えであり、仏界の生命という自

己の偉大な可能性を発揮することは不可能であると説かれています。

### 生命を映し出す明鏡

仏や法を生命の外にあるものとして崇拝するのと対照的に、中国の天台大師は「観心」という観念観法を成仏への修行としました。天台の法門では、一切衆生に成仏の可能性があることを認めています。その修行法は複雑で生活に追われる一般の民衆には到底、実践不可能なものでした。

日蓮大聖人は、誰にも内在する仏性を呼び覚ませ、涌現させるという実践法を明かされたのです。それが、御本尊に向かい南無妙法蓮華経と唱えていくことです。成仏とは、単に「心の状態」をいうのではなく、精神、肉体、振る舞いを含む総合的な生命境涯をいいます。天台による「心を観る」という内省の修行は、成仏へのごく部分的な方法でしかありません。

大聖人は、私たちの仏性を映し出すための「明鏡」として御本尊を顕されたのです。池田SGI会長は、次のように語っています。

「鏡は、目に見える顔や姿を映す。仏法の鏡は、見えない生命をも映し出す。鏡は、反射の法則など光の法則を応用して、姿が映るように工夫した、人間の知恵の成果である。御本尊は『宇宙』と『生命』の法則に基づいて、“汝自身”の実相を見つめ、成仏できるようにした、仏の『智慧』の究極であられる」（「親愛なるアメリカの友へ」125頁）

大聖人は御本尊についてこう明言されています。

「此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱うる胸中の肉団におはしますなり」（御書 1244頁）

### 大聖人の勝利の御境涯

大聖人は幼少のころから世の悲惨をなくし、民衆を幸福に導きたいとの燃えるような決意を抱かれています。大聖人はこの誓願のもと、あらゆる経典を学び尽くされた結果、南無妙法蓮華経こそ釈尊の教えの真髄であると悟られたのです。弘教を進めるなかで、大聖人は多くの厳しい迫害を乗り越えていきました。なかには命にも及ぶ難が幾度かありました。

竜の口の法難の後、佐渡に流罪された大聖人は御本尊を書き顕され、信心強盛な門下に授与されていきます。このことに関して、大聖人は「三沢抄」にこうおしたためになっています。「我につきたりし者どもにまことの事をいわざりけるとをもうて・さどの国より弟子どもに内内申す法門あり」（同 1489頁）

大聖人は相次ぐ激しい迫害にすべて勝利され、後世の弟子たちが自分と同じ

境涯を涌現できるようにと、御自身の勝利の生命を一幅の曼荼羅として顕されたのです。大聖人は「経王殿御返事」にこう仰せになっています。

「日蓮守護たる処の御本尊を・したため参らせ候事も師子王に・をとるべからず、経に云く『師子奮迅之力』とは是なり、又此の曼荼羅能く能く信ぜさせ給うべし、南無妙法蓮華経は師子吼の如し・いかなる病さはりをなすべきや」(同 1124 頁)

### 宝塔・虚空会の儀式

法華経の「見宝塔品第 11」で、巨大な宝塔が地下から出現し虚空に屹立する様が描かれています。大聖人は、この宝塔とは人間生命の偉大な可能性を示したものであると説かれます。(「阿仏房御書」1304 頁参照)

この宝塔の出現に続き、「虚空会の儀式」が展開されていきます。儀式には全宇宙のいたる所から集った諸仏、菩薩ほかあらゆる大衆が参列しています。仏は神通力をもって、儀式の大衆をすべて虚空に持ち上げ、宝塔の前に陣列させた後、法を説き始めました。

大聖人は、この「虚空会の儀式」を御本尊の「相貌」(そうみょう=姿)として用いられました。宝塔を表す南無妙法蓮華経は、御本尊の中央にしたためられています。木像や絵像では、仏のすべてを表現しきることはできないため、大聖人は御自身が悟られた妙法と一体不二である生命境涯を表現するために、文字を用いられて御本尊を御図顕されたのです。

池田 S G I 会長は、「それゆえ(木像や絵像は)決して、南無妙法蓮華経という因行果徳をすべて具足した根本法を表し尽くすことはできません。色心の二法のうち、心は言葉で表せます」と語っています。(「御書の世界」第 2 巻 224 頁)

### 不惜身命の信心

誰もが生命の内奥に偉大な可能性を秘めているということは、ほとんどの人が合意しますが、すべての人々や生き物についてこの原理を本当に信じられるかとなると、さほど容易ではないようです。大聖人は、誰もが自己の仏界の生命を涌現することができるよう、御本尊を顕されたのです。しかし、ただ御本尊を受持するだけでは、それは叶いません。力強い仏界の生命の涌現を可能にするのは、信心と自行化他の実践です。

大聖人は「日女御前御返事」にこう仰せになっています。

「此の御本尊も只信心の二字にをさまれり以信得入とは是なり(中略)南無

妙法蓮華經とばかり唱へて仏になるべき事尤も大切なり、信心の厚薄によるべきなり仏法の根本は信を以て源とす」(同 1244 ㊦)

### 法華弘通のはたじるし

大聖人は同じく「日女御前御返事」に、「竜樹天親等・天台妙楽等だにも顕し給はざる大曼荼羅を・末法二百余年の比はじめて法華弘通のはたじるしとして顕し奉るなり」(同 1243 ㊦)と仰せられています。今日まで、SGIは創価三代会長(牧口常三郎、戸田城聖、池田大作)の指導によって、「法華弘通のはたじるし」と大聖人が仰せのとおり御本尊を根本に、人類の平和と幸福を目指して堂々と妙法広布に前進してきました。

それゆえ、創価三代会長の精神のままに御本尊に南無妙法蓮華經と唱え、広宣流布へのSGI活動に励むメンバーは、大きな功德と福德を積み、輝かしい人生勝利を勝ち取っていただけるのです。

(*Living Buddhism*, May-June 2010, pp.86-89)

## 7. 功德

日蓮大聖人の仏法の実践の功德は、私たちの生命を磨き、境涯の変革をもたらしますが、その功德の実証は、現実の人生における幸福と充実感に満ちた勝利の結果として現れます。また同時に、その人の人間としての振る舞いや人間性の上に現れるべきものです。

### 顕益・冥益

日蓮仏法の実践による功德には、「顕益」と「冥益」があります。顕益とは、目に見えて、はっきりと分かる功德を言います。それは経済的な利益、病気の克服、就職などさまざまです。冥益とは、すぐに目に見える結果として現れなくても、長い間、地道に信心を続けていった時、生命の境涯が大きく変わり、苦境に負けない強い自分になっていくことです。

大聖人はこう仰せです。「南無妙法蓮華經と心に信じぬれば心を宿として釈迦仏懷まれ給う、始はしらねども漸く月重なれば心の仏・夢に見え悦こばしき心漸く出来し候べし」(御書 1395 ㊦)

また、池田SGI会長は次のように述べています。

「木の成長は、毎日見ているとわからない。しかし、5年、10年たてば、その成長は歴然である。それと同じように、目には見えないが、広宣流布のために勇んで行動すれば、必ず最高の生命となり、永遠の幸福を勝ち取っていただける。これが冥益である。一生のうちに、揺るぎない幸福の人生を築くことができるのである」（聖教新聞 2002年9月11日付）

「冥益」とは、言い換えれば「人間革命」の行程であると言えます。

大聖人は「教行証御書」に「今末法には初めて下種す冥益なるべし」（同 1277 頁）と、末法における仏道修行の功德は「冥益」が根本であると仰せになっています。したがって最も大事なことは、南無妙法蓮華經を信受することによって目覚めた仏性の“種子”を、日々の信心と実践を通して育てていくことです。時が経つにつれて、仏界の境涯は自己の生命に深く根付いていき、その豊かな功德、福德を満喫していくことは間違いありません。

## 変毒為薬

日蓮仏法の功德についてもう一つの見方は、「変毒為薬」という法理に示されます。これは、端的に言えば、苦しみ、悩みの生命を希望と歓喜に満ちた生命へ転換するということです。2世紀から3世紀にインドで活躍した大乘の論師である竜樹は、「妙法蓮華經」の「妙」について、「偉大な医師が、毒をもって薬と為すようなものである」（同 944 頁、通解）と説明し、また中国の妙楽大師は「治し難いものをよく治すゆえに妙というのである」（同 944 頁、通解）と述べています。

つまり、妙法の力用とは、絶望を無限の希望に変え、苦悩を歓喜と充実に変え、不運を福運に変えていくことであると論じているのです。

上記の竜樹の言葉について、大聖人はこう仰せです。「毒と云うは何物ぞ我等が煩惱・業・苦の三道なり薬とは何物ぞ法身・般若・解脱なり、能く毒を以て薬と為すとは何物ぞ三道を変じて三徳と為すのみ・・・即身成仏と申すは此れ是なり」（同 984 頁）

大聖人は、「毒」とは「煩惱・業・苦」の三道に縛られた生命であると仰せです。「煩惱」とは、貪（むさぼ）り、瞋（いか）り、癡（おろ）か、慢心などの心の次元の迷い。「業」とは、煩惱に基づく身・口・意の行いと、行ったことによって自分の生命に残る悪い影響力。「苦」とは、煩惱と業の結果としてもたらされる苦しみの報いです。

誰しも苦は避けたいものですが、生命の本質を知らずに苦を減じようとしても逆に愚かな行動に走れば、さらに悪い業を重ねていくこととなります。この煩惱・業・苦を繰り返して、不幸から不幸へ、悪から悪へと流転する生命が「毒」

で譬えられます。

しかしながら、妙法を信じ実践するとき、あたかも偉大な医師が毒をもって薬をつくるように、私たちは自身の煩惱や苦悩を幸福への因に変えていくことができるのです。つまり、煩惱・業・苦の三道（毒）に流転する凡夫の生命が、そのまま妙法の力で「法身・般若・解脱」の三徳（薬）の働きを具えた絶対的幸福境涯へと転じていくのです。

「法身」とは、永遠の真理と一体の永遠の生命です。「般若」とは、仏の悟りの智慧のことです。「解脱」とは、エゴや執着や束縛から解放された自在で広々とした仏の境涯です。

## 六根清浄

大聖人はまた功德とは「六根清浄（ろっこんしょうじょう）」であると説かれています。「御義口伝」の「法師功德品四箇の大事」で、「功德とは六根清浄の果報なり、所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は六根清浄なり、されば妙法蓮華経の法の師と成つて大なる徳（さいわい）有るなり」（同 762 頁）と仰せです。

「六根清浄」とは、私たちの生命全体が浄化されることです。六根とは、眼・耳・鼻・舌・身・意、すなわち外界を認識する感覚器官であり、「根」とは、その感覚器官が持っている能力を意味します。つまり、六根清浄とは、六根の本来もっている能力が、最大限に発揮されることで、人間としての成長、充実につながっていくのです。

## 悪を滅し善を生ずる

「御義口伝」に「悪を滅するを功と云い善を生ずるを徳と云うなり」（同 762 頁）と仰せです。仏法では、人間の生命に等しく善と悪が存在するとして、その悪の根源を無知であると説きます。つまり、私たちの生命それ自体が、あらゆる生命と宇宙の根本法たる妙法であるということへの無知です。自分自身や他の人々の生命に内在する仏性を認めることができないのです。その「根源的な無知」を「元品の無明」といい、それが貪・瞋・癡などの煩惱の温床となり、不幸を招いていくのです。

池田 S G I 会長は、「元品の無明」について、次のように述べています。

「（元品の無明は）最も認識しがたい迷いであり、正体不明であるがゆえに、知らないうちに、私たちの生命において悪の力を持つようになる。また、あらゆる生命に具わるものであるがゆえに、自他の生命に暗い衝動を現します」（大

白蓮華 08 年 7 月号、三沢抄講義)

「しかし、この元品の無明は、強力な悪の力を持っているとはいえ、その正体は、結局は『無知』であるがゆえに、『智慧』によって必ず打ち砕くことができるのです。その智慧をあらわした人が『仏』です。その最極の智慧を教える法が『正法』です。釈尊の法華経や日蓮大聖人の三大秘法の南無妙法蓮華経が、この『正法』の意義を持つことは言うまでもありません」(同)

「私たちは、この正法を信ずる『信』をもって仏の『智慧』に代え、凡夫でありながら、元品の無明を破る力は、『智慧』であり、『信』であり、『心の力』に他ならないのです」(同)

したがって、自身のもつ仏性を信じ、題目を唱えていくなれば、ちょうど灯火が暗闇を照らすように、己心の元品の無明を克服することができるのです。

### 究極は人の振る舞いに

大聖人が「教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ」(同 1174 頁)と仰せのように、仏法実践の真の功德は、私たちの振る舞い(全人格的行動)の中に表れるものです。自身の仏性が人間性、行動の輝きとして現れるとき、私たちは真の幸福を実感するばかりか、他の人々の人間性をも触発していくのです。こうして尊敬と思いやりの波動が周囲にどこまでも拡大していくのです。

(*Living Buddhism*, May-June 2010, pp.90-94)

## 【第 2 部 日蓮大聖人の御生涯】

日蓮大聖人の御生涯——それは、全人類の不幸を根絶し、すべての人々に仏の境涯を開かせたいとの誓願と慈悲に貫かれた妙法弘通の御一生でした。そして、民衆の幸福を阻む一切の悪を責め抜き、大難につぐ大難の御生涯でもありました。

<パート 1 >

### (1) 御聖誕・出家・遊学

日蓮大聖人は、貞応元年(1222年)2月16日、安房国長狭郡東条郷の片海(現在の千葉県鴨川市小湊)という漁村で誕生されました。漁業で生計を立てる庶民階層の出身でした。